

佳作

私の耳

千葉県 松戸市立河原塚小学校六年 新井 まみ

小学二年生の時、耳鼻科検診が学校内でありました。判定は、聴こえが悪いとのことでも風邪をひいた時に受診する近所の耳鼻科に母と行きまじやっぱりそこでも聴こえが悪いという結果で、大きな病院に行って検査をするようにとのことでした。

大病院では、同じように聴力検査をして新たにを行ったのは、CT検査でした。その結果、耳の骨が一つだけ無いということが分かりました。その時は「そうなんだー」くらいな気持ちでした。

でも、不思議なもので、現実を知らされたら、困ったり、そこから不便かと思うようになりました。例えば、友達との会話の中でうまく聞こえなくて、「もう一回言ってくれる?」

と言う申し訳ない気持ちや、友達が、「もういいやー!」

ました。すると波形でもちゃんと音が聞こえているのです。

手術後一年経過したところで、

「もう、反対側の耳と同じまったく問題ない耳の聞こえですよ。」

と、ずっと私の耳を診断から手術まで、診てくださった先生に言われました。私は、お礼を言わずにはいられませんでした。

「私の耳を聞こえるようにしてくれてありがとうございます。」

と伝えることができました。

私の一つだけなかった耳の骨は体の中で一番小さな骨である事、無駄なものなんてないんだという事、耳が聞こえるようになった現実、どれをとっても感動でしかありません。この自分におきた事実をずっと忘れません。

と返事をする悲しさを味わい、小学三年生の時に治療をすることを自分で決めました。治療は、手術です。この手術を沢山行っている東京に行き、夏休みを利用して、手術をしたい理由を伝えました。手術は冬休みにお願ひしました。

「クリスマスイヴだけいい?」

と手術をしてくれる先生に確認されましたが私の中ではまったく問題なかったです。

そして手術の前日に、病院へ入院しました。家族は付きそいできないので、二平方メートルのベッドに独りぼっちです。今まで一人で泊まりなどしたことがないので、ドキドキしました。ベッドをおおうようにカーテンがすきまなくしめられています。ねむくもないのに、ベッドの上での生活は、「家族は何しているんだろう」と、そればかり考えていました。

次の日、家族が来てくれて、見守られながら手術室には看護師さんと歩いて行きました。治してもらうことだけを考えてむかっただけですが、手術が終わって部屋に戻る時は涙がこぼれていました。

手術後、私の耳は少しずつ変化があらわれ、音がひびくように感じました。六ヶ月後に聴力検査をし